まちの「がんばりびと」を紹介

住人十彩（じゅうにんといろ）

2021 August

#16 ～社会福祉法人 清流会（桜ヶ丘）～

社会福祉法人清流会は、障がい福祉に関する様々な事業に取り組まれています。
今回、障がい者支援施設 氷川学園の施設長・西坂千賀子さん（60）に、法人設立のきっかけや、これまでの取り組みなどのお話を伺いました。

「共に在りたい」と願い

清流会は、障がい福祉に関する様々な事業に取り組んでいる社会福祉法人。昭和56年に障がいのある人の生活を支援する施設「氷川学園」を開園し、今年で40周年を迎えた。

法人設立のきっかけは、西坂さんの妹に障がいがあったこと。父・哲さんの「親亡き後も安心して生活できるように。」という願いに、初代理事長の田口志久磨さんをはじめ、同じ思いを持つ多くの親が賛同し、一緒になって関係機関への働きかけに奔走。八代地域で最初の知的障がい者入所更生施設として氷川学園が誕生した。

西坂さん自身も、幼少期から妹と共に生活していく中で自然と障がい福祉に関心を持つようになり、福祉関係の学校を卒業後、氷川学園の職員として父と共に日々利用者と向き合ってきた。

「利用者と共にする生活は、毎日発見があって楽しいですよ。みんな個性的で感性が豊かなんです。」と笑顔で話す西坂さん。

年齢や障がいの種類、得意なことや苦手なことも十人十色。時には思うようにいかないこともあるというが、職員の皆さんは、「『共に在りたい』と願い…」という法人理念のもと、利用者と共に活動することに喜びとやりがいを持っている。

清流会が誕生してからこれまでの約40年で、障がい福祉現場を取り巻く環境は大きく変わった。

清流会では現在、氷川学園への入所・通所のほか、共同生活支援、児童発達支援、相談支援、県南地域における発達障がい者支援など、多様化するニーズに合わせた支援に取り組んでいる。

新型コロナウイルスの影響

で、利用者の活動も制限を余儀なくされ、地域の人たちと触れ合う機会が少なくなってしまったが、それでも西坂さんは「コロナが収束したら、これまでよりもっと地域の身近な存在になれるように、また新たな活動も考えていきたいです。」と前を向く。

❶ 利用者と職員とのふれあい。1人ひとりの個性を大切に。

❷ 子どもたちへの発達支援。運動面、精神面の発達を促し、生活する力を養う。

❸ 講演会で清流会の取り組みを紹介する西坂さん。支援者向け研修の講師としても精力的に活動。

❹ 利用者と地域の人との触れ合いの場として毎年11月に開催される「ひかわの森マルシェ」には、多くのお客さんが訪れる。

清流会の5つの取り組み

- 障害者支援施設 氷川学園
- 児童デイサービス 風楽
- 相談支援事業所 風舎
- グループホーム
- 発達障がい者支援センターわるつ

▲詳しくはこちら（清流会ＨＰ）